

村上信一郎教授のあゆみ

著者	船尾 章子
雑誌名	神戸外大論叢
巻	65
号	4
ページ	1-4
発行年	2015-03-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1085/00001724/



村上信一郎教授のあゆみ

船尾 章子

旅客機のパイロットなら、休日にも小型機の操縦を楽しんでいるかもしれないし、プロの演奏家は、純粹に私的な時間にも、楽曲を奏でることだろう。そのとき、愛好家の行為と、職業的専門家としての行為を隔てるのは、行為をなす技量ではない。むしろ、社会関係、すなわち受け手に対する責任の大きさの違いなのだ、と思う。

研究者についてもそうだろうか。大いに個人差はあるとしても、大学人という職務を離れての研究には、古い衣を脱ぎ捨てるかのように、なにかしら明瞭な変化が起こるのではないか。そう考える方が、やはり自然なような気がする。

村上信一郎教授が31年間の大学人生活に区切りをつけ、国際関係学科を去っていかれた。この節目に、私が本誌上にささやかな記念の銘を刻むことになったのは、なにか巡りあわせなのだろう。ここに、古い衣を拾い上げ、その来歴を記すことにしたい。

* * *

まずは簡潔に、その研究の足跡を辿ってみよう。それは、かなりまっすぐな道すじを描いていることがわかる。

信一郎青年のイタリア学事始めは、カトリック六甲教会のピエトロ・ペレッティ神父の個人教授で、イタリア語を学ぶようになったことであった。神戸大学文学部史学科2年次だったという。カトリック教会との縁は、さらに過去へと遡る。母上が信仰に篤く、聖書の教えは、幼少の頃から生活の一部を構成していたといえるからである。

史学科在籍中に、この青年を近現代イタリア政治史研究へと導いた重要な道標は、ローマ大学教授、ピエトロ・スコッボラの著作、*Dal Neoguefismo alla Democrazia Cristiana*（『新教皇主義からキリスト教民主党へ』1957年）、であつという。本書の外国語訳は、今なお、日本国内には見当たらない。この事実は、この学部生が驚くべき速さでイタリア語を習得したことを物語っている。

言語だけではない。イタリア政治史の勉強も、卒業論文を学会誌に掲載するよう勧められたほどの水準にまで達した。実際、学部卒業の3年後には、『西洋史学』第93号に「近代イタリア・カトリック運動における非妥協主義の確立」と題する論文が、そして『イタリア学会誌』第22号には「ルイジ・ストゥルツォ

の政治思想と非宗派性の問題」と題する論文が掲載されたが、いずれの原型も、卒業論文の中に既に胚胎していたのであった。

神戸大学大学院文学研究科に進学後、ローマ大学政治学部留学した信一郎青年を指導したのは、いうまでもなくこのスコッボラ教授である。教授は、大学で国家 - 教会関係史講座を担当するかたわら、進歩的なカトリック民主主義者のリーダーとしても活躍していた。離婚法廃棄を問う1974年の国民投票をめぐることは、キリスト教倫理と自由民主主義社会における市民の政治選択とを峻別する姿勢を貫き、教会やキリスト教民主党に対抗しつつ、離婚法廃棄反対の運動を指導した。1983年から4年間は、キリスト教民主党の刷新をめざして、同党上院議員を務めてもいる。

若き日に、こうしたイタリアのカトリック政治運動の息遣いに接する中で、歴史的な手法によるミクロな政治分析という堅牢な研究の枠組みが培われた。それはさらに、神戸大学大学院法学研究科博士課程において洗練を加える。

その後、ファシズム期から現代へ、イタリア国内政治からヨーロッパ統合へ、と研究業績の幅は広がっても、研究の基調には終始一貫してこの方法論があった。その確たる立ち位置があればこそ、現代日本政治のミクロ分析はもちろん、南欧カトリック圏の社会史のような研究領域にまでも、独自の存在感を示すようになっていったのだろう。周辺領域の研究者との学術交流を通じて円熟味を増したその仕事ぶりは、例えば、「一党優位体制の崩壊」（山口二郎編『民主党政権は何をなすべきか』岩波書店、2010年所収）に現われている。

* * *

それでは、組織人としての歩みはどうか。こちらでも、国際関係学科一筋に、2つの大学で職分を全うしている。教師生活の第一歩は、名古屋市近郊の中中部大学で、国際関係学部の創設準備に参画することから始まった。1983年のことである。この頃、私立大学が相次いで国際関係学部を新設し、時代の潮流をなすかの如くであったが、この大学の新学部には、地域研究と現地調査を重視するという特色があった。開設の中心人物のひとりであった人類学者の川喜多二郎氏の構想を汲むという。

若き信一郎助教授は、その国際関係学科で、国際政治史を担当し、地域研究も手ほどきした。そこは、イタリア政治史研究の成果を学生に伝授できる上に、様々な領域の、特定地域に密着した研究を手がける専門家と交流できる場所でもあった。創設時の学部長であった経済史家、河野健二教授の縁で、読売新聞の論壇時評に寄稿したり、TBSの報道番組でイタリア政治にコメントするなど、ジャーナリズムとの関係が築かれたのもこの時期だったと聞いている。

日本では、冷戦終結をはさむ1980年代後半から1990年代前半にかけて、国際

関係に対する社会的関心が急速に高まった。学生たちは世界の動きに敏感だった。いま思うと、国際関係学の研究・教育に携わる大学も学会も、やや浮足立っていたかの感さえある。

そのような時代に、働き盛りの15年間を国際関係学部国際関係学科で過ごしてから、信一郎教授は、生まれ育った神戸を、教師生活の後半約15年の舞台と定めた。ここ、神戸市外国語大学外国語学部国際関係学科で担当する科目は、国際政治史および国際関係論（法・政領域）となった。いずれも、国際関係学科のカリキュラムにおいて、基幹科目に位置づけられているから、多様な学生の必要と関心に応えなければならない。私立大学の国際関係学部と比べると、国際関係を扱う科目の数が限られることもあって、教室では国際政治をめぐる、幅広い理論と話題が取り上げられた。そうすると、イタリア政治に触れられる機会はおのずと制約されることになる。

教授のゼミには、特に勉強熱心な学生が集まることで知られ、国立大学大学院に進学して研究者を志す者も見受けられる。とはいえ、その主流を占めていたのは、やはり同時代の国際政治の動きに関心を寄せる学生であったから、それぞれの問題関心を尊重しつつ指導するよう心掛けて来られたようである。

他方、正規の授業とは別に、大学の市民向け公開講座のような、自由に話題を設定できる場面では、イタリアが饒舌に語られた。2013年前期に大学の教養講座連続4回を担当したときのタイトルは、「カプリッチョ・イタリアーノ《イタリア奇想譚》」である。その口上には、

国際政治史という専門を離れ、わたしがイタリアで体験したことの中から4つのトピックを選んで、好きな映画や音楽にもふれつつ、ときにはワインなども味わいながら、自由気ままにお話しさせていただきたい

とある。「ときにはワインなども」、と書かれているからかどうかはともかく、講座は大盛況であった。

教授は、弁舌の才に恵まれている。しかも、根っからの座談好きで、場の雰囲気をつかえるのも巧みである。学術研究の約束事にとらわれることなく、くつろいだ雰囲気でも感興の赴くままに語るとき、イタリア政治史研究では掬いきれなかったなにかが、ふと顔を出すのかも知れなかった。

大学の市民講座の受講生の大半は、現役を退いたばかりの団塊の世代で、比較的高学歴の方が多いように見受けられ、男性がかなりの比率を占める。イタリア映画やワインを語るかと思えば、マフィアやベルルスコーニ現象にまで話題が及ぶ、知的にして洒脱なイタリア談義が、こうした層の知的需要を満たし

たことは疑い得ない。

これを単発の教養講座に終わらせることなく、同種の教養講座をいくつか組み合わせて、知的欲求の高い社会人向けの再教育プログラムを提供する可能性も、これから検討してみてよいのではなかろうか。少子高齢化時代の大学にとって、新たな挑戦となりうることを、この試みは示唆している。

* * *

こうしてみると、村上信一郎その人が、ペレッティ神父とスコッポラ教授というふたりのピエトロに示された堅牢な石の街道を、変わらぬ足どりで歩むなか、その周囲で、日本の大学と大学を取り巻く環境とが、大きく変貌した、ということになるのかも知れない。

当の信一郎大人は、大学教師の衣を脱いでもなお、久しく果たせなかった『現代イタリア』に関する新書を執筆し、イタリア政治の現状分析についての諸論文を一冊の本に編集し、さらにはイタリア近現代史のなかのカトリック教会に関する著作を出版する云々、一途に先を急ぐご意向のようである。

あとに残された国際関係学科は、1987年の創設から数えて30年近い歳月を経た今も、創設時のカリキュラムが、大きく変わってはいない。現代社会の要請をふまえて、その見直しと再構築が急務となっている。信一郎大人には、組織的な捉われのない自由な立場から、その31年の経験に照らしてこの学科の将来をひき続き見守っていただきたい。そう胸の内で呟きながら、その前途の末永く恙なきを、祈念したい。

Salut !